

## ⑥ 演習

一斉講義の時の基本演習とは別に節の終わりに、2, 3 時間設ける。問題内容は3段階に分け、プリント。習熟度に応じた問題段階を指示、一斉指導や個別指導を適宜する。

## (2) 反省・問題点

- 進度が遅れがちであった。
- 上位学力者への対応に問題が残る。
- 教師側からの働きかけが多く、生徒の創意が失われた面もある。

実践Ⅱ — 習熟度別講座編成による指導法の研究 —

## (1) 経過・指導法 対象：1 年全クラス

## ① 授業形態

- 普通クラス — 基礎事項の習熟を図る。
- 発展クラス — 基礎事項の徹底と更に発展した事項の習熟を図る。

1・2・3 組 ⇨ { 普通2クラス  
発展1クラス

4・5・6 組の分け方も同様。

## ② 編成の時期・方法

時期 — 数Ⅰ・第1章終了後(5月中旬)

方法 — 各種テスト結果を参考にさせ、生徒の希望による。時に指導もする。

編成替 — 1・2 学期の考查終了後に各実施。  
(実際は2～3名の移動だった)

## ③ 指導法

- 普通クラス：ていねいな説明、基本的な計算練習、机間巡視による個別指導、進度は遅い。
- 発展クラス：発展的事項をとり入れた授業、週2回の課題学習、課題の提出率は良好。

## ④ テスト・評価

定期テストは全員同一問題。平常点、伸長度を加味し評価。

## (2) 反省・問題点

- 概ね当初の目的に沿った授業が展開され、それぞれのクラスの目的にかなったと思える。
- それぞれのクラス内でもまた習熟度の差が生じてくるが、その際の指導法に問題が残る。
- 生徒の意欲へどう作用しているか。テスト、評価はどうあればよいか等が今後の研究課題である。

◇ **理科** 課題学習を中心とした習熟度別学習指導法の研究(生物Ⅰ, 化学Ⅰ), 学習の

つまずきの発見(化学Ⅰ)。

## (1) 研究テーマ設定の理由と研究内容

入試状況からみると、理科の成績はかなり平均的であるが、1 学期末になると、その差が開き、学習に対して自信を失い、更にその差が開く傾向がみられるので、自信を取り戻させ、一人ひとりが積極的に参加する学習指導法を試みた。

## (生物Ⅰ)

## ① 課題の提示と指導

難易2段階の予習課題を与え、問題意識を持たせると共に、生徒の状況把握に努めた。生徒の学力に見合った項目について発表させ、学習に自信を持たせるようにした。

## ② 結果

考查の成績でみると、上位者の人数は、実験、統制両学級間にあまり差がなかったが、下位者は実験学級の方が少なかった。

## (化学Ⅰ)

## ① 課題の提示と指導

一般に数量的問題に弱い傾向がみられ、個人差も大きくなることから「量的概念の定着のための指導法」をテーマに、均質グループを編成し、授業の中で、問題演習の時間を多くし、また予習、復習の課題を多く与えた。

## ② 結果と反省

実験学級では、演習、課題の中で、形成的評価がよくできて成果があがった。グループの編成方法と自己評価の活用を研究したい。

## ③ 「つまずきの発見」とアンサーボックスの活用

学習の理解度をチェックし、生徒の思考活動の活発化を図り、発問応答を多くする手がかりとして、アンサーボックスを活用し、フィードバックを繰り返しながら指導した。「原子量とモル」の計算では事後テスト、把持テスト共、実験、統制両学級間にあまり差がなかったが、「化学反応式とその計算」では、伸び率(把持テストと事後テストの正答率の差)でみると、実験学級が13.0と上まわった。

## (2) 今後の課題

生物、化学共、実験学級の進捗がかなり遅れた。今後、さらに教材の精選、構造化について研究しなければならないと思っている。

◇ **英語科** 学習習熟度別講座を部分的にとり入